

Title	はじめに
Sub Title	Preface
Author	桑川, 麻里生(Kumekawa, Mario)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2015
Jtitle	Booklet Vol.23, (2015.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000023-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

本bookletでは、芸能、文学、浮世絵、漫画に登場する「女性アイドル」をテーマとしている。「大学の研究所が、何をやっとなんだ？」というお叱りの声も聞こえてきそうだが、真面目にやっておりますので、どうぞ寛恕いただきたい。周知のように、もともとは「アイドル (idol)」という言葉は「偶像神」を意味するものであり、そこから「偶像として崇拜される人」をも意味するようになった。さらに、1970年代以降の日本における「アイドル」とは、若く、愛らしく、多くの男性の疑似恋愛の対象となるような女性有名人を指す言葉となった。しかし、そのような意味での「女性アイドル」は、古今東西存在するのではないか。しかも、アイドル的な存在は、文化や芸術の歴史の中である特別な役割を担ってきたのではないか。さらには、現代の芸術表現にとっても、アイドル的な存在は重要なメディアとなっているのではないか。とりわけここ数年、AKB48やももいろクローバーZ、さらにはドラマ『あまちゃん』などが社会現象とも言うべき成功をおさめ、しかもそれが多種多様なメディアにおいて展開を見せている状況を思うにつけても、「アイドル」について論じる意義は大きいと考えた。そのような問題設定のもと、さまざまなジャンルの専門家にそれぞれの立場から「アイドル」にアプローチしてもらったのが、本bookletである。タイトルは『アイドル♥ヒロインを探せ!』とした。無論、1963年にシルヴィ・バルタンが主演してヒットしたフランス映画『アイドルを探せ!』のパロディーであるが、「アイドル」というものが学術的にはっきりと定義されたものでもない以上、まずは「アイドルと何か?」「アイドルはどこにいる (いた) のか?」ということを問うことから考究を始めなければならない、と考えた。それが反映したのが、このタイトルであるとお考えいただきたい。

巻頭論文となった内藤正人氏の論考は、独特の意味で本bookletの基調論文のような意味合いを持つものだ。浮世絵の研究者である内藤氏は、アイドルという言葉の持つ「偶像神」という意味合いと、「若い女性芸能者」という意味合いを兼ね備える歴史上の人物像を考察していくが、その原像は、天鈿女命であり、卑弥呼であり、出雲阿国である。すなわち、巫女であり、白拍子であり、遊女である。内藤氏は、日本における芸能のそのような根源を見つめつつ、江戸期の浮世絵に描かれた人気者の女性たちについての論に入っていく。その登場するのも、やはり、遊女、芸妓、役者、さらには人気読物の登場人物である。これらの女性像に人々が見たであろう現実と虚の交錯は、現代の「アイドル」にわれわれが見ているものと非常に近いものがある、と内藤氏は論じる。その意味で、「アイドル」は普遍的な現象なのだ。内藤氏の論文によって、本bookletの射程も相当程度、明らかにされたと言えるだろう。

続く論文では、米文学者でアメリカン・ポピュラー・ミュージック研究者の大和田俊之氏が、現在世界的な成功を収めつつあるPerfumeとBABYMETALの分析をしながら、日本が海外に発信するポピュラー音楽が担ったイメージについて考察している。大和田氏によれば、PerfumeとBABYMETALが活躍する前提として、1980年代にイエロー・マジック・オーケストラ（YMO）が果たした役割にはやはり大きなものがあるという。大和田氏はYMOのイメージ戦略を出発点にしつつ、PerfumeやBABYMETALに至る展開を、「テクノオリエンタリズム」、「自己植民地化」「かわいさ」と言ったユニークな概念を導入しつつ論じている。すなわち、ハイテクノロジーのイメージと「日本らしさ」が結びつき、さらに「人間らしさの喪失」がポストヒューマンの人間観とも結びついた「テクノオリエンタリズム」を最も体現していたのはYMOであったわけだが、Perfumeはそれを引用しているのである。ただし、大和田氏によれば、Perfumeにおいては「ハイテクの未来」はYMOにイメージされたような形ではやってこない。Perfumeは「実現しなかった未来」を「切ない」ものとして表象しているものであり、それはまた日本という国家のイメージでもある。他方、BABYMETALは、ハードロックあるいはヘヴィメタルという「世界標準」の語法と「アイドル」という日本的なモチーフが結びつき、日本国内での成功を待たずに世界的な成功を手にした、とされる。アイドルの「かわいさ」をミニアチュール概念と結びつける四方田犬彦の議論を引きながら、大和田氏はBABYMETALの「かわいさ」はヘヴィメタルの枠組みに揺さぶりにかけていると論じる。結論として大和田論文は、「環太平洋的想像力」によって、「アイドル」を捉えていく可能性を示唆している。

ふたりの慶應義塾教員の論文の後は、「芸能」の現場に長年立ち続けてきた方々にご登場いただいた。NHK国際放送の人気プログラムである『J-MELO』のプロデューサーをつとめる原田悦志氏は、日本のポピュラー音楽を世界に発信してきた経験を振り返りながら、いわゆるJ-POPが世界に受け入れられるための条件を多角度から考察している。原田氏によれば、海外におけるJ-POP受容にとって重要なジャンルは「アニソン」と「ビジュアル系」と「アイドル」だという。しかし、この3つはもちろん純粋に音楽上の「ジャンル」ではなく、より多様な要素を視野に入れた発信様式であり、ビジネスモデルである。そのような観点から、原田氏は「アイドル」の音楽の分析を進める。さまざまにメディアがミックスされ、イメージ戦略も狙える中から発信されてくる「アイドル」たちの音楽は、ある種の現代芸術ともみなしうる。狭義の「アイドル」には当てはまらない、きゃりーぱみゅぱみゅや初音ミクについても原田氏が大胆な解釈を行っているのも、「アイドル」をむしろ「アート」の装置ととらえているからである。他方、J-POPは本質的に日本的なものでもある。未来の「アイドル」は、各地でより「現地化」と同時に、日本文化の本質もまた発信していくだろうと、原田氏は考察している。

芸能関係の著書も多い人気コラムニストである泉麻人氏は、「アイドル」の歴史を「3人娘」という枠組みを手がかりに回顧している。そこでは、日本の

ショービジネスにおいて、「アイドル」はつねに「3人娘」として登場したことが語られる。言及される3人組のアイドルは、1950年代半ばから人気を博した江利チエミ、美空ひばり、雪村いずみの元祖3人娘、1950年代に“スパーク”した、伊東ゆかり、園まり、中尾ミエの「スパーク3人娘」、1970年代に子供から大人まで魅了した小柳ルミ子、天地真理、南沙織の「新3人娘」、その少し後輩として登場した、桜田淳子、山口百恵、森昌子の「中3トリオ」、そして三人組のアイドル・グループ、キャンディーズである。泉氏の活き活きとした回想によって、「センター」や「推しメン」、あるいはメディアミックス的な商法といった、現代のAKB48に継承される「アイドル」の構造である。

最後のパートは、英文学者・演劇学者の小菅隼人氏による論文とインタビューからなる。まず、論文の方では、シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』におけるクレオパトラのイメージを「アイドル」として考察している。すでに本bookletの内藤論文において、「偶像神」でありながら「女性芸能者」でもある「アイドル」における現実性と虚構性のからみあいが興味深く描写されたわけだが、小菅氏は同様の枠組みをシェイクスピアが描くクレオパトラにも見出す。すなわち、強国の君主をことごとく誘惑する妖婦としてのクレオパトラと、強い意志をもった王である女性としてのクレオパトラが、アントニーの死を経て、自らも死を選ぶに至る過程の中で、「ひとつの身体」へと統合されていく過程として、この戯曲を解釈している。そして、「ひとつ」になったクレオパトラの身体として「アイドル」としての彼女も完成するのである。すなわち愛に突き動かされながらも、誇り高い死に向かっていくことで、現実でありながら虚像、虚像でありながら現実である「エジプトの女王クレオパトラ」が完成するのだ。それはまた、優れて演劇的な展開であり、俳優が役を演じることそのものの意義探求にもつながっていく。

最後に、同じく小菅隼人氏が、日本を代表する少女漫画『ガラスの仮面』の作者である美内すずえ氏にインタビューしている。美内氏によれば、少女時代の自身にとって、漫画のヒーローやヒロインはまさに「アイドル」であり、「うっとり眺めていた」という。実在の人物より、漫画の登場人物に恋をしていたという美内氏は、「二次元」を愛する今日の若者たちの先駆とも言えよう。続いて、話題は『ガラスの仮面』の人気キャラクターたちがどのように生み出されたかに移る。しかし、美内氏によれば、主人公の北島マヤは、「アイドル」ではなく、むしろマヤのライバルたちにアイドルらしい個性や才能、華やかさが備わっているという。このようなキャラクターの構成・構造は、美内氏が少女時代に魅了された将棋映画『王将』にもつながるものだと美内氏は語る。インタビューはさらに、映画、演劇、文学、歴史の中に、「想像力と想像力の結晶」としてのアイドルの根源を探求してゆく。

以上のような内容を得た本bookletは、ささやかな小冊子ではあるが、現代の日本および世界の「アート」の文脈にとって大きな創造力と起爆力をもった「アイドル」という表現装置の基本的な構造を描き得たと信じる。それは、慶應義

塾の研究者たちと芸能や創作の現場にあるゲスト執筆者諸氏との生産的な協働作業によるものであった。写真や資料を拝借するに際しても、各プロダクションには実に寛容なご理解をいただいた。すなわち、プロダクションとしては「アイドル」として定義したくないタレントやミュージシャンの画像や情報も、「アイドル」をテーマとする本叢書にあえてご提供いただいたのである。ご理解に深く感謝申し上げたい。

慶應義塾大学アート・センター副所長 糸川麻里生